

# ヴィクトリア朝女性の自立と結婚について

— George Eliotの初期の作品において —

伏 原 玲 子

## 〔抄 録〕

ジョージ・エリオットの初期の作品から『アダム・ビード』(*Adam Bede*)と『フィーリクス・ホルト』(*Felix Holt*)を取りあげ、作品に登場する女性たちの生き方から彼女たちの自立と結婚の関わりを考察していく。『アダム・ビード』からはヘティーとボイザー夫人を『フィーリクス・ホルト』からはトランサム夫人とエスタを取りあげる。いずれの女性もヴィクトリアという時代に束縛されながら、そのなかで葛藤し、結婚によって人生を大きく左右される。さらに、当時の教育制度と女性の自立がどのような関連があったかを検証すると共に、その結果、結婚が女性の生きる上で切実な課題であり、職業にも相当するくらいに重要なものであったことを明らかにすることで、ヴィクトリア時代の女性の生き方をとらえていくものである。

キーワード：女性の教育，女性の領分，結婚の選択

## 序 論

ジョージ・エリオット(George Eliot, 1819-80)は女性の生き方に多大な関心を寄せていた作家であり、実際に参政権運動や教育、職業、雇用、財産などの女性の地位向上のために幅広く貢献した。しかし、不幸な結婚生活に耐え忍ぶ女性が決して少なくはなく、結婚という題材を扱った小説を書くことで、同様の立場におかれた女性の問題を提起することとなった。彼女自身は、優れた知性と才能を兼ね備えた女性であったので、結婚か仕事かという選択を迫られることなしにどちらも両立しながらこなすことができた。しかし、ヴィクトリア時代の女性の地位は想像もつかないくらいに低いものであった。選挙権もなく、人生を自分自身で選択する余地はほとんどなかった。女性の人生は、生まれながらに男性への服従と忍耐で形成されていた。人生の転機であるはずの結婚ですら、自由な恋愛結婚はほとんど許されず、家同士の政略結婚

の形態が大部分であった。女性は、生まれたときから家庭内で将来良き妻、良き母になれるようにしつけられ、結婚することで幸せを保証されるという観念を持たされていた。また、身分が高ければ高いほど個人と個人ではなく、家と家の結びつきという観念がごく一般的であった。実際、当時の傾きかけた名門の貴族の娘が、自分より少し階級の低い経済力のある中流階級へ家系の存続を計るために嫁ぐという話も少なくはなかった。一方、結婚という道をも阻まれた女性は、自立して生きる手段を捜すほかはなかったのである。そうは言っても女性が一人で生きていく方法はそんなに容易ではなかった。ちょうど時代は産業革命直後の手動形式から機械化が進みかけているときであり、それら进行操作する人手が必要な時期であった。それにもかかわらず、女性が男性と同等に求められることはなく、あくまでも家庭内の仕事が彼女達の領分であるとの暗黙の了解があった。しかしながら、ある程度の知性をもつ女性ならばガヴァネス(家庭教師)で自活する方法が残されていた。それ以外には、中流階級以上の家庭の召使や小間使いといった職種しか見い出せない。このように、女性が職業に就くことは極めて厳しい時代であり、女性が選択できる職業がわずかしかな存在していなかったのが事実である。このような時代背景のもとで、女性たちはどのような経緯で結婚を決断したのか、またなぜ自立することを断念したのかということを各小説の登場人物から探究していきたい。

## I

まず、初めに『アダム・ビード』(Adam Bede)<sup>1)</sup>のヘティーとボイザー夫人の生き方から彼女たちの結婚に対して抱いていた理想を探ると共に、ヘティーが幸せな結婚のチャンスを逃した理由を明らかにする。彼女は、孤児として叔父のボイザー氏に引き取られている。ボイザー夫人からは、将来幸せな結婚ができるようにという配慮から、家庭内の仕事を厳しく教え込まれている。しかし、彼女は楽観主義で、虚栄心の強い女性であったために、自分の美貌を武器に少しでも身分の高い男性に注目を浴びたい一心で外見を磨くことばかりに気をとられていた。彼女のそのような性格を早くから見抜いていたボイザー夫人やアーウィン牧師は、周囲の人間にそれとなく警告を与えていた。17歳の乙女の心をとらえたのは、地主の息子のアーサーであった。彼も見事にヘティーの美しさに魅了された一人であったが、最初から将来の伴侶としてではなく、一時的な遊び相手としか彼女を考えていなかった。つまり、当時では社会的階級を抜きにして結婚を考えることは不可能であった。階級が上があれば上がるほど、自分より低い階級に属する相手との結婚は困難なものと考えられていた。従って、アーサーがヘティーと交際したのも将来のことを全く考慮していなかったからである。ところが、ヘティーの方は、そうは思わずすっかり玉の輿にのれるものと誤解して、将来の自分の姿を勝手に空想しては喜びに浸るのであった。このような二人の見解の相違が、結果的に悲劇を生み出すこととなる。では、次にヘティーがアーサーとの結婚により、どのような生活を夢見ていたかということを次に見

てみたい。

And Hetty' s dreams were all of luxuries; to sit in a carpeted parlour, and always were white stockings; to have some large beautiful earrings, such as were all the fashion; to have Nottingham lace round the top of her gown, and something to make her handkerchief smell nice, like Miss Lydia Donnithorne' s when she drew it out at church; and not to be obliged to get up early or be scolded by anybody. She thought, if Adam had been rich and could have given her these things, she loved him well enough to marry him.<sup>2)</sup>

このことから分かるように、ヘティーは、アーサーを愛する気持ちから彼と一緒にになりたいという純粋な気持ちからではなく、自分自身が一生経済的に安定した生活を送るための生涯の保障を手にするために結婚したいと望んだだけであった。農夫の娘であり、特別な教育も受けていない彼女にとっては、結婚以外に自活する方法を見出すことはできなかったのである。当時の女性にとっての一番の関心事は、仕事でもなく、趣味でもなく、結婚がすべてであった。言い換えれば、特別な階級でもなく、特別な知性を持っていない限り女性の生きていく道はかなり制限されていたと言えるであろう。従ってヘティーが、経済的自立を得るために条件の整った結婚を望んだとしても何ら非難されることはないはずである。ヴィクトリア朝において、女性の地位は現代からは想像もつかないほど低いものであり、女性が独力で生きていくのは現代よりも遙かに厳しいものであったと推測される。このような社会的背景のなかで、ヘティーのとった行動については、非難されても仕方ないと思うが、若干17歳の少女には人生を独力で背負うにはまだ荷が重すぎたのではないだろうか。こういった結末において、この保守的なヴィクトリアという時代に生まれた女性たちに対して同情の気持ちを向けることしかできない。時代の変遷によって、社会的情勢だけではなく、女性の地位も随分向上してきたのは、喜ばしいことである。同じ人間として生まれても、女性という性を保有しているだけで、社会から差別されることに疑問に感じる。しかし、長い歴史においてずっと女性の地位が向上することなく、女性たちはあるがままの人生を受け入れてきたのであった。つまり、彼女たちは、賢明にも、自分たちをとるべき道を運命のように受けとめ、それに反対を唱えるような能力を残念ながら持ち合わせてはいなかった。ヘティーは、孤児というハンディを克服するために、自分の力で生きていこうとは決して考えず、他力本願で楽をして贅沢な暮らしをする選択をしたのである。

さらに、ヘティーと同居中のボイザー夫人（ヘティーの叔母）は常々ヘティーの身を案じていたが、ヴィクトリア時代の女性として結婚についてどのような考えをもっていたかを次の文から見てみたい。

...It' s all very fine having a ready-made rich man, but may-happen he' ll be a ready-made fool; and it' s no use fillng your pocket full o' money if you' ve got a hall in the coner. It' ll do you no good to sit in a spring-cart of your own, if you' ve got a soft to drive you: he' ll soon turn you over into the ditch. I allays said I' d never marry a man as had got no brains; for where' s the use of a woman having brains of her own if she' s tackled to a geck as everybody' s alaughing at? She might as well dress herself fine to sit back' ards on a donkey.' <sup>3)</sup>

このように、何の財産もなく、その上高度な教育も受けていないヘティーの幸福になる唯一の可能性は結婚する他にはなかったと考えていることが分かる。ポイザー夫妻と同居しながらヘティーは、女性として将来必要な家事手伝いや子守といった仕事を教え込まれたのであった。彼女のような労働者階級に属する家庭では、教育を受けることより家庭内の実務を覚えることの方が重要視されていた。仮に女性が男性と同等の知識をもったなら、余計な雑念が生じて本来の女性の領分である家庭生活に支障をきたすと思われたからだ。また、女性の意識事体も何ら疑うこともなく、与えられた道を素直に歩むべきものだと信じられていた。

## II

この章では、『フィリークス・フォルト』(*Felix Holt*)<sup>4)</sup>をとりあげて論じていきたい。この作品は、1866年に発表されたもので、題名と同じフィリークス・ホルトを主人公として、彼が関わる周辺の人々の生きざまを描いたものである。トランサム夫人は、レディーに属する女性で、過去の秘密に苦悩し続け哀れな自尊心の高い婦人として登場する。ジョージ・エリオットの他の作品ではみられない異質なタイプの女性として際立って描かれている。つまり、彼女は名家の生まれにも関わらず、明らかに経済的理由だけでうだつの上がらないトランサム氏と愛情のない結婚をした。ジョージ・エリオットはこの結婚という題材を小説中に取り入れ、この時代の読者の心を見事に捉えた。一口に結婚と言っても幸せな日々を過ごす者、または不幸で苦しむ者などさまざまなケースが描かれている。しかし、*Felix Holt*においては後者の不幸な結婚がとりあげられている。結婚の動機が、最初から愛情が基盤ではなく、経済的事情によるもので、生活を築いていくというお互いの強調性にも欠けることは明白であろう。愛情がない上に、子供までもうけてしまったもののその子供に対してすら、愛情をもつことができずにいた。次の言葉から、トランサム夫人の結婚生活における苦悩を見ることができる。

Men are selfish. They are selfish and cruel. What they care for it their own pleasure and their own pride....For more than twenty years I have not have had an hour' s

happiness....I am old,and expect to little now – a very little thing would seem great. Why should I be punished any more?<sup>5)</sup>

上記よりトランサム夫人の現状に不満を抱きつつも、自分自身の力ではそれを打破する力を持ちあわせていないのであった。結局、何らかの変革をすることもなく、現状の生活を続行するより他に生きていく術を見出すことができなかったのである。このことでトランサム夫人に対して非難を浴びせたり、人間性を疑ったりはできない。というのは、この時代に女性が自立して経済的な確立をすることは、大変厳しい状況であったからだ。さらに、トランサム邸の相続権をもつエスタの結婚という大問題を前にして揺れ動く胸中を次に見てみたい。

In the ages since Adam' s marriage, it has been good for some men to be alone, and for some women also. But Ester was not one of these women: she was in-tensely of the feminine type, verging neither towards the saint nor the angel. She was “a fair divided excellence, whose fulness of perfection” must be in marriage.<sup>6)</sup>

エスタは、立派な教育を受け、家庭教師としての職も得てはいたが、それだけでは自立するには充分ではなかった。この時点では、結婚を生きるための経済的安定と精神的安定とを獲得する手段として考えていたことが明らかである。当時の社会的通念が、専業主婦や職業婦人という言葉すら存在していなかったように、結婚することは女性が家庭に入るということを意味していたのであった。生まれた時より、暗黙の了解で女性の幸せは結婚にあるとされてきた中で、エスタが、このような結婚観をもつのも当然の結果と言えよう。

### Ⅲ

次に、一般的にヴィクトリア時代の女性に対する教育がどのようなものであったかを検証しながら、社会において、どのような女性が求められていたかを様々な資料<sup>7)</sup>をもとに述べていきたい。まず、19世紀を代表する成人教育といえ、1820年代に創始されたメカニック・インスティテュート<sup>8)</sup>であった。この機関の目的は労働者階級の男性に対して科学的知識を普及するところから始まった。つまり、職工たちのために創始されたのであった。最初から女性の教育を対象とは考えていなかったため、男性を中心にした教育に女性は適応していかなければならなかった。しかし、実際に女性の入学が許されたのは、1830年以降であった。さらに、1851年にこのメカニック・インスティテュートの会員となったのは、男性の会員に対して女性はわずかに9.4%にすぎなかった。この結果から当時の社会では、女性が男性より劣った地位に置かれていたことが明白である。実際の学問的な教育が施されたのは、1852年以降であり、ようや

く女性にも国語、文法、書き取り、表音式綴り方などの科目の学習が許されたのである。しかし、これらの学習も新たな労働分野への拡大に結びついたかどうかの報告は出されていない。こういったメカニック・インスティテュートの教育は、職業上の昇進よりも、むしろ個人的又は社会的な利益をもたらしたと判断されるほうが多い。さらに、1800年から1914年の期間に労働者階級の女性は、希望すれば夜間学校へ通うことができた。その内容は書き方、読み方、算数、裁縫、編み物などであった。社会的な容認があったとはいえ、その教育の根底は、「妻や母として社会的役割を果たす女性」を理想として教育していたのであった。

一方、中産階級の女性の教育は、前に述べたメカニック・インスティテュートとは若干受講科目が異なり、文学、音楽、舞踏、植物学、体育、図画など幅広く選択することが可能であった。この階級に属する女性たちは、実務的なものよりも一般的な教育の不足を補うものとして学習に意義を感じていたばかりか、このような知識は実際に、経済的に恵まれなかった既婚女性が私営の学校を開校するにも有益であった。さらに、大学教育となると、1867年になるまで女性への道は開かれていなかった。そして、大学の学位を取得することを男性と同様に承認されたのが、ケンブリッジ大学で1947年のことであった。といっても、まだまだ男女による差別は、はなはだしく様々な面で女子学生というだけで不利な条件を我慢しなければならない厳しい現実があったとの報告がある。このような状況のもとで苦勞の末学習した結果、女性たちは、教師などの職業に参入することを容易にした。つまり、教養教育を受けた女性は、教職などの以前から女性に開放されていた職業に良い地位を求めるのに有利であったことを証明することとなった。

階級を問わずとも、19世紀は、女性の教育の過渡期であり、このころから教育を受けたエリート女性とそうでない女性との格差はますます広がる一方で、教育を受けた女性は性の差別なしに専門的な職業に就くことが可能となったのである。そうは言うものの、実際には結婚生活に破綻を来していても、財産も職業も持たない女性に自立の道すらなく、ひたすら忍耐するほかは考えられなかった。1880年代から1890年代にようやく女性の財産所有権が認められ、離婚しても自活する扉が開かれたのであった。

## 結 論

ヴィクトリア朝においては、現代のように女性がキャリアを積みば自立して生きていける時代ではなかったために、随分女性は、忍耐と生きるために自我を抑え、男性（未婚時代は父親に結婚後は夫）に対して尽くし、一生を終えるというのが一般的な生き方とされていた。女性という性の持ち主であるというだけで、男性とは違った生き方を選択しなければならないという理論が当時の社会的通念であり、何の疑いもなく受け入れられていた。その要因の一つとして、女性は、能力的に劣っていると見なされていたために、教育も高度なものを受ける必要は

ないと考えられていた。女性の将来の目的は、職業夫人になることではなく、あくまでも結婚して良き妻、良き母となることに限定されていたからだ。このことを裏づけるのに女性への大学進学が初めて実現したのが、19世紀後半であり、その大学に進学できる女性は中産階級以上のある程度の経済力のある家庭の子女と限定されていた。当初は、男女がキャンパスで男女が席を隣にすることも許されず、受講科目も男子学生と同じ科目を学習できず、女性は裁縫や刺繍などと家庭生活に必要な独特な科目の履修を義務づけられていた。では、こういった大学での知識を身に付けた女性は、その後どのような人生を送ったのであろうか。残念ながら、産業やビジネス界で活躍したものは、ほんのわずかにすぎず、その大半は教師となり、そのどちらも選べなかった女性は従来通りの風習に従い、結婚という道を選んだのであった。さらに、このような女性の高学歴に対して、批判の声も多く、その理由の一つとして科学や歴史、外国語という知識をもてば、女性の日常的な家事労働が単純すぎてできなくなるという懸念から、女性を教育することに反論するものも後を絶たなかったのである。しかしながら、このような女性の知的能力の開発は、徐々に社会全体を大きく変化させる一因になったことは確かである。長年、女性という性に生まれたという理由だけで人生の選択肢がなかった女性を立ち上げさせ、女性も男性と同等に学ぶ権利を勝ち取ったために、社会で活躍する場も少しずつ増えてきた。さらに、結婚に対する価値観も生活手段から、人生を高めるためのパートナーという認識に変化していった。ヴィクトリア朝の女性が、生きていくために忍耐を強いられた不幸な結婚が同じ女性の手によって知性を磨き、自立することで結婚の形態を変えていったということが明らかである。この現象は、男性にとって驚異であったに違いない。女性の社会的進出により、男性の立場を揺るがす可能性が浮上してきたからだ。さらに、それにより、女性の関心が内から外へつまり、家庭から社会へと広がっていった。それまで女性の領分が家庭だけとされていたが、1849年代からガヴァネスが激増した。その背景には、結婚適齢期の男性の絶対数が圧倒的に女性よりも少なく、その激しい競争から破れた女性が社会的上昇を求めてその安定した職に殺到したものと思われる。しかし、その唯一の職業に多くの女性が殺到し、ガヴァネスも供給過多の状態に陥った。つまり、結婚からも職業からも見放された不幸な女性が存在していたことは、疑いの余地がない。その後は、お決まりのフォールン・ウーマンとなる以外方法はなかったである。結婚できた女性は、幸運であったがその生活が幸せであったかどうか疑問である。というのもヴィクトリア時代が、男性に甘く女性に厳しい時代であったことは明白であったからだ。女性の一生は服従に始まり、服従で終わると言っても決して過言ではない。男性優位の社会制度のなかにおいて、女性は人格をも捨て父親、夫、子供に対して無償の愛を捧げ、奉仕することで自分自身の立場を保身することができた。女性が家庭で大きな役割を果たしていたことに男性は、その恩恵を失いかけて初めて悟ったのである。女性という性の違いだけで、能力や適正などを無視して家庭に閉じ込められていたヴィクトリア朝の女性たちが先駆者となり、次世代の女性の立場を高めるために、さまざまな社会との葛藤は皮肉にも女性の自立を促し、

その結果結婚によって手に入れた経済的確立を自らの力で得ることができるよう改革した。その原因は、封建的色合いの強かったヴィクトリア朝において、男性が家庭で自分の立場を優先させたいばかりに、女性を家庭に縛り、自立させなかったと言えるのではないであろうか。そうすることにより、女性は、結婚という狭い枠のなかに閉じ込められ、他に特別な能力をもたない限り、一人で生きていくことができなくなったのである。言い換えれば、男性が自分の立場を剥奪されないように、女性を守るように見せかけながら、自由に女性が生きる権利を与えなかったとも言えるのである。女性が自立すれば自立するほど、男性の立場は脅かされる。結婚が女性にとって安住の地ではなくなることは、女性自身よりももっと男性に対して驚異を与えたことは間違いないであろう。結局、男性中心であった社会的背景が、結婚という生涯の保証を引き換えに女性を束縛した結果、女性の自立が容易に果たされなかったのである。

〔注〕

- 1) Adam Bedeはすべて、阿波喬訳『アダム・ビード』（開文社出版、1995）による。
- 2) Adam Bede,(Everyman:London,1994),p.93.
- 3) Ibid.,p.92.
- 4) Felix Holtはすべて、富田成子訳『フィーリクス・ホルト』上下(日本教育センター、1994)による。
- 5) Felix Holt, The Radical. vols.10-11 of The Writings of Gerorge Eliot.(本の友社、1996),vol.2,p.333.
- 6) Ibid.,pp.274-275.
- 7) ジューン・パーヴィス著、香川せつ子訳、『ヴィクトリア時代の女性と教育』－社会階級とジェンダー（ミネルヴァ書房、1999）
- 8) Ibid.,p.46.

(ふしはら れいこ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導教員：古我 正和教授)

2000年10月18日受理